様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００００５０

研究課題名（和文）人新世における生政治：脱炭素社会に向けた社会哲学研究

研究課題名（英文）Biopolitics and Social Philosophy in the Times of Anthropocene: Critical Intervention in Climate Justice

研究代表者
箱田　徹（Hakoda, Tets）

天理大学・人間学部・准教授

研究者番号：４０５７０１５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：気候変動に関する思想研究が、人文学と社会科学の最新の潮流をつなぐ結節点として機能していることを文献研究と現地調査を通じて明らかにした。具体的な意義と重要性は、(1)採取主義批判を日本に本格紹介する役割を果たしたこと、(2)急進的な気候運動の実践が、非暴力直接行動や市民的不服従の歴史と現在を活性化させ、歴史学、社会学、哲学などにおける抵抗、実力闘争、暴力、権力といった主題群の再評価につながっていることを示したこと、(3)哲学思想分野において気候変動の研究が進んでいない日本において、統治論や生政治論といった社会哲学的な概念を援用しつつ、気候変動が当該分野の喫緊の課題であることを示したことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本の哲学思想研究では気候変動への社会的・科学的危機感が十分に共有されていない。また世界的な気候運動の高まりと思想研究とのかかわりへの関心も低調である。こうしたなかで本研究の学術的意義は、現代の欧米圏における批判的な社会理論（現代思想）が気候運動と現代資本主義批判とをいかに交錯させているかを論文執筆や書籍翻訳を通して明らかにしたところにある。このような成果を示した本研究は、脱炭素社会の実現によって気候崩壊の影響を最小限に食い止めようとする日本の市民社会の真摯な動きに対して、最新の知見とともに考察を深める理論的な枠組みを提供するという社会的意義を果たした。

研究成果の概要（英文）：This study has revealed that philosophical research on climate change functions as a nexus connecting the latest trends in the humanities and social sciences through bibliographic research and fieldwork. The specific significance and importance of this research are as follows: (1) Providing a comprehensive overview of the international perspectives on extractivism to Japan; (2) Showing that radical climate justice movements have revitalised the world history of non-violent direct action and civil disobedience, reactivating Theoretical interests on a series of concepts on resistance, struggle, violence; (3) Demonstrating that climate change is an urgent issue in the field of social philosophy by drawing on concepts of critical social theory such as theories of government and biopolitics.

研究分野：思想史

キーワード：気候変動　人新世　生権力　採取主義　脱炭素　現代思想　社会哲学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

人新世論には、人間の生の「絶滅」に関わるという意味で、核兵器やホロコーストと同じくカタストロフィ言説の側面がある。しかし過去の絶滅論との決定的違いは、現在の政治的決断だけでは地球温暖化を阻止することはできないばかりか、予測不能な自然環境の変化に対し、人類が存在する限り対応し続けなければならない状況を言い当てている点だ。現代の社会哲学は、同時代の自然科学によって示されたこの新たな「人間の条件」への応答を、今日における哲学的課題の一つとして真剣に検討する必要があるだろう。

他方、温暖化問題の出現により、今日の対抗的な社会運動は「気候正義（climate justice）」というグローバルな連帯の軸を手にした。大気や海洋には境界がないことで、富とリスクの国内的・国際的な不平等がより明確になるとともに、脅かされるのがみずからの現実の生活であるという認識が急速に浸透しているからだ。気候正義と脱炭素（脱化石燃料、とくに石炭火力の停止）を掲げ、現行の社会経済体制の根本的変更を求める動きは、国際社会と諸国家の温暖化対策の動向に大きな影響を及ぼすとともに、グローバルな政治空間を開拓しつつ、ローカルな課題との接続を実現してもいる。温暖化問題のもたらす切迫感は、未来に恐怖ではなく希望を見出そうとする人びとの原動力ともなっているのである。

本研究課題の核心的「問い」とは、人新世という「時代意識」のもと、温暖化抑制と脱炭素を目指す社会からの実践的問いかけは今日いかなるかたちを取っているのか、そして社会哲学はその動きに対し、どのような自己革新をもって応答すべきか、というものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、人新世論の哲学的考察と同時に、ドイツの脱炭素をめぐる社会実践の比較研究により、温暖化問題が今日の哲学と社会に及ぼす影響を明らかにすることを通じて、現代社会哲学を更新することであった。

本研究が「社会哲学」というとき、念頭にあるのはフーコーやランシエール、ネグリらの戦後フランス社会哲学である。一般に戦後社会哲学は啓蒙の逆説と呼ぶべき事態を徹底的に省察することで、新たな社会の構想を探究してきた。だがフーコーらはそうした関心を絶やさない一方で、社会とは個人と集団による反乱の舞台であり、反乱が生起させる個人と集団の政治的主体性こそが民主的で平等な社会の原動力であるとの立場を強調する。

温暖化をめぐっては各国の「歴史的責任」（温室効果ガスの累積排出量）に圧倒的な不平等がある一方、発展途上国が「権利」として排出量を拡大すれば世界的な温暖化対策は成立しない。このジレンマを政治哲学的に扱うこともできる。だが規範の探究を概念の精緻化でよしとせず、現実に実践的に関与する議論の枠組みを作るには、社会実践のなかで概念が出現・展開していく過程を検討することが欠かせない。本研究の独自性は、気候変動をめぐる社会運動が「正義」を実践的にどう捉えているのかを探ることで、批判的な社会構想の現在形を明らかにし、現代社会哲学の読み直しを行うところにある。

ところでフーコーは、西洋近代の統治権力による人びとへの「全体的かつ個別な」管理統制のありようを「生政治」または「生権力」と呼んだ。ネグリは両者をあえて区別し、多様な人びと（マルチチュード）の生政治とグローバル権力（生権力）との全面的対立へと読み替え、近代社会では「生」が闘争の舞台かつ争点であるというフーコーの論点をアップデートした。本研究の目的は、人新世論における論争に理論的に介入した上で、生政治を始めとする批判的な社会理論の諸概念を参照し、気候正義の社会実践を分析することで、社会批判と新たな主体性の探究という社会哲学の伝統的課題を実践しつつ、人新世をめぐる理論研究にもインパクトを与えることであった。

３．研究の方法

本研究では、日本語、フランス語、英語、ドイツ語を用いた文献研究を行うとともに、ドイツでの現地調査と資料収集も実施した。収集/検討した文献の分野は、思想史、社会哲学、歴史学のほか、社会学などである。またマスコミや運動体の情報も積極的に収集し、研究に活用した。

４．研究成果

（1）2019 年度　気候変動問題をめぐる社会運動と社会哲学との交点を探るという本研究のテーマを、採取または採取主義という観点を導入することで研究を進めた。今日、世界各地で反体制運動やさまざまな異議申立の動きが起きる一方、気候正義運動にはかつてないほどの関心が向けられ、大勢の人びとが参加している。世界大で展開するこれら２つの「反乱」には「システムへの反乱」という共通の特徴が見られる。いわゆる広場運動やオキュパイ、香港や台湾、韓国での大規模な抗議行動、そして黄色いベストといった一連の運動は、既存の社会のあり方に根本から異を唱えている。他方、気候正義運動は、温室効果ガスを大量に消費する社会の大規模かつ速やかな転換の必要性を訴える。これらの 2 つの運動が採用する、占拠や封鎖といった戦術は、問題となっているシステムの、また人・物・金・情報の円滑なフロー（流れ）を止めることによっ

て、現代社会が抱える深刻な社会経済政治的矛盾を露わにすることを目的とする。例えば、ドイツ・ケルン郊外における褐炭鉱山拡張反対運動の実践や、ドイツのラディカルな気候正義運動には、そうした効果を具体的に見てとることができる。社会運動が止めようとするフローへの批判は、社会哲学の見地から「採取」または「採取主義」の問題として捉え返すことができる。採取とは地球上にある天然資源の大規模開発を指すと同時に、人びとが営んできた豊かな社会的関係・社会的知性・社会的生産を利用し、価値を生産することだ。その活動は、工業とは異なり、資本の出現にはるかに先行して存在する富の諸形態に依拠しているという側面もある。こうした採取の動きを、ラディカルな現代資本主義体制における、金融とロジスティクスとの連関のなかで論じている。そしてこの両者を連結することが、気候正義運動の実践的・思想的意義を考察する上で大きな意義をもつことを指摘した。

（2）2020 年度　本研究の主たる関心である生政治概念の批判的摂取と現代的応用について、採取（extraction）や採取主義（extractivism）という概念に注目した理論的な取り組みが近年、批判的な社会理論のなかで大きな広がりを見せている。採取-採掘は、天然資源や一次産品の大規模な収奪とそれに伴う自然環境や地域社会の破壊をもたらすだけでなく、金融とロジスティクスという高度に情報化・金融化された今日の資本主義のあり方を捉えるうえでのキータームとなっているのである。日本ではほとんど紹介されてこなかったこの潮流を、人文地理学者である北川眞也と原口剛の両氏とともに『思想』（2021 年 2 月号）で翻訳・紹介する企画を実現させたことが、最大の成果である。前回の科研費で招聘したサンドロ・メッザードラ氏の論考を翻訳・紹介するなどして、これまでの研究との関連性をつけつつ、問題意識を掘り下げる取り組みができた。人新世論とのかかわりでは、最新刊『Brutalisme』でも気候変動と採取主義との関係を踏まえながら独自の論を展開するアフリカを代表する思想家アシユ・ムベンベの Covid-19 パンデミック論を翻訳・紹介した。他方で、ジョルジョ・アガンベンはパンデミック下での現代社会のコントロールのあり方を鋭く分析し物議を醸した。この議論を踏まえつつ、気候変動やフーコー戦争論の観点から社会の現状を批判的に分析する論考も執筆した。このほか気候変動や人新世論とも深いつながりをもつ論者の書籍を 3 点翻訳刊行すべく準備を進めた。

（3）2021 年度　いわゆる現代思想と現代の社会運動、とりわけ気候運動との関係を考察した。人間活動由来の温室効果ガスを原因とする地球温暖化がますます深刻化し、その悪影響が顕著に現れている。にもかかわらず、温室効果ガスの主要な排出源である化石燃料の燃焼について、それを支えるインフラストラクチャ（商品としての化石燃料が採掘から精製や加工、運搬を経て、燃焼・消費されるまでのプロセスを支える制度や設備）のオペレーションは、停止するどころか拡大を続けている。このことは、温暖化の進行を停止する意志よりも、これまでどおりの経済社会活動（ビジネス・アズ・ユージュアル）を続けようとする意志と利害が勝っており、現状変更に向けた国内的・国際的合意が存在しないことを示している。この状況への介入をめぐって、すでに取り組まれている運動実践やその歴史を踏まえた上で、世界各地の気候運動にかかわる実践家や研究者のあいだで活発な議論が行われている。当該年度においては、「化石資本」という観点から産業資本主義批判と気候変動を組み合わせたことで、近年とみに注目を集めるスウェーデンの研究者アンドレアス・マルムの議論を、最新作『パイプライン爆破法』とともに日本語圏の読者に紹介するとともに、論文や講演といった機会をつうじて、気候運動における現状認識と戦術論についての先端的な議論が、非暴力直接行動、市民的不服従をめぐる過去と現状のさまざまな解放運動や抵抗運動の歴史を積極的に踏まえつつ、ポスト植民地主義、反レイシズム、BIPOC、フェミニズム、クィア、トランスといった現代の運動との連関を探りながら展開されていることを示すことができた。このほか、フーコーの生政治論の現代的展開として注目される、アントニオ・ネグリ＆マイケル・ハートの著作『アセンブリ』の翻訳刊行（共著）を実現し、また関連イベントをとおして、本研究がテーマとする生政治論と採取主義批判との連関についての研究に継続して取り組むことができた。

（4）2022 年度　本務校の特別研究員制度を利用してベルリンに滞在し、本研究課題にかかる調査研究を行った。文献調査の他、関連する活動家や研究者への面会や運動現場への訪問も行った。こうしたなかで次の知見を得た。1）運動側の関心は「暴力」か「非暴力」かなのではなく、実力闘争の質にあること。気候運動におけるラディカル派と穏健派は、戦術や手法の違いが強調されがちだが、気候変動の抑制という共通目標を実現する上で、両者の連携こそが主要な関心事である。2）研究者の関心は、運動における「暴力の是非」ではなく、非暴力実力闘争が民主主義社会における意志決定プロセスに与えるインパクトに向けられている。3）また両者を通じて、資本主義、脱植民地主義、入植者植民地主義、人種主義、コモン、採取主義、インターセクショナリティ、アボリショニズム、フェミニズム、クィアネス、ディサビリティといった近年の社会運動と批判的な社会理論における主要な関心事への言及が強く意識されている。4）そのうえで運動と理論の課題は、国や地域というローカルな文脈に（3）で挙げたような理論上の大きなトピックを落とし込むこと、また個別課題への動員闘争を超えたところで気候運動の争点を作りだしていくこと、そしてとりわけ研究の側からは理論的な知見と現場との往還的な関係を強化していくことにある。以上の知見と本研究課題の基本的な問題関心を踏まえた上で、研究代表者はこれまで取り組んできたミシェル・フーコーの統治論にかんする研究を改めて整理し、著作と

して刊行した。また、グローバルサウスや先住民居住地域を中心に、化石燃料やレアメタルの採取に伴う大規模で不可逆的な環境破壊への関心が高まるなか、ヨーロッパの気候運動も採取主義や入植者植民地主義への批判を強く意識している。こうした文脈のなか、国際的な研究者のネットワークを広げると共に、人種主義や暴力をめぐる理論研究への意義を確認し、今後の展開に向けての足がかりを得た。

（5）2023 年度　21 世紀前半の現代社会では、加速する気候変動が地球に劇的な変化をもたらし、人間だけでなく生態系そのものが危機に瀕している。この危機的状況に、市民社会と哲学思想研究はどのように対応していくのか？　本研究では、この問いを出発点として、西ヨーロッパ（特にドイツ）における気候変動運動の議論と実践を具体的な事例を通して紹介・検討し、その思想的背景の解明に取り組んだ。パンデミックやウクライナ戦争など、研究開始時点では予測し得なかった世界的な歴史的展開の中で、市民社会の一部では、緩和と適応を通じて 1.5℃目標の現実的な実現可能性を守るためには、現在の資本主義システムの根本的な変革が必要であるとの認識が高まってきた。他方で、現在の政治・経済・社会・文化システムを改革せずとも、技術革新によって気候崩壊は回避できるという言説を支える産業界や政治の力も日増しに強まっている。このような背景下で、気候変動に関する思想研究が、人文科学と社会科学の最新の潮流をつなぐ結節点として機能していることが、本研究を通じて明らかになった。本研究の具体的な意義と重要性は、(1)採取主義批判を日本に本格的に紹介する役割を果たしたこと、(2)急進的な気候運動の実践が、非暴力直接行動や市民的不服従の歴史と現在を活性化させ、歴史学、社会学、哲学などにおける抵抗、実力闘争、暴力、権力といった主題群の再評価につながっていることを示したこと、(3)哲学思想分野において気候変動の研究が進んでいない日本において、統治論や生政治論といった社会哲学的な概念を援用しつつ、気候変動が当該分野の喫緊の課題であることを示したことである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 箱田徹	４．巻 94
２．論文標題 気候ではなく世界のあり方（システム）を変えよ：気候危機と運動のラディカリズム	５．発行年 2021年
３．雑誌名 季刊ピープルズ・プラン	６．最初と最後の頁 74-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 北川眞也・箱田徹	４．巻 1162
２．論文標題 採掘-採取,ロジスティクス ： 現代資本主義批判のために	５．発行年 2021年
３．雑誌名 思想	６．最初と最後の頁 8-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 アシル・ムベンベ（箱田 徹 訳）	４．巻 48(10)
２．論文標題 普遍的呼吸権	５．発行年 2020年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 224-230
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 箱田徹	４．巻 75（10）
２．論文標題 人口対人民 ： 生政治と恒常的危機に抗する政治的主体の構築	５．発行年 2020年
３．雑誌名 福音と世界	６．最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 サンドロ・メッザードラ／ブレット ニールソン（箱田 徹 訳）	4．巻 1162
2．論文標題 多数多様な採取フロンティア ： 現代資本主義を掘り起こす	5．発行年 2021年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 12-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 箱田徹	4．巻 48(5)
2．論文標題 採取：現代思想と気候正義の蝶番	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 198-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 箱田徹	4．巻 87
2．論文標題 変わる欧州の社会運動：左翼ポピュリズムと気候変動問題	5．発行年 2020年
3．雑誌名 季刊ピープルズ・プラン	6．最初と最後の頁 84-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 箱田徹	4．巻 974
2．論文標題 非暴力、サボタージュ、オルタナティヴな未来：ヨーロッパ環境運動のラディカルな景観	5．発行年 2023年
3．雑誌名 世界	6．最初と最後の頁 74-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 箱田徹	4．巻 79-3
2．論文標題 気候運動と反動的な未来	5．発行年 2024年
3．雑誌名 福音と世界	6．最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 清水知子，箱田徹，水嶋一憲	4．巻 52-7
2．論文標題 ネグリ思想の継承と再考：メディア・環境・フェミニズム	5．発行年 2024年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 8-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 箱田徹
2．発表標題 気候運動のラディカリズムが問うもの――『パイプライン爆破法』を読む
3．学会等名 ピープルズ・ムーブメント研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 酒井隆史・水嶋一憲・佐藤嘉幸・箱田徹・飯村祥之
2．発表標題 （パネリスト参加）
3．学会等名 『アセンブリ』（岩波書店）刊行記念　『〈帝国〉』から『アセンブリ』へ、ネグリ＝ハートの軌跡
4．発表年 2022年

１．発表者名 箱田徹
２．発表標題 廣瀬純『新空位時代の政治哲学』へのコメント
３．学会等名 フーコー研究フォーラム
４．発表年 2023年

〔図書〕　計6件

１．著者名 箱田 徹	４．発行年 2022年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 112
３．書名 今を生きる思想　ミシェル・フーコー　権力の言いなりにならない生き方	

１．著者名 アンドレアス・マルム著 ; 箱田徹訳	４．発行年 2022年
２．出版社 月曜社	５．総ページ数 268
３．書名 パイプライン爆破法 : 燃える地球でいかに闘うか	

１．著者名 アントニオ・ネグリ／マイケル・ハート著；水嶋一憲・佐藤嘉幸・箱田徹・飯村祥之訳	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 492
３．書名 アセンブリ	

１．著者名 小泉義之・立木康介・箱田徹ほか著	４．発行年 2021年
２．出版社 読書人	５．総ページ数 208
３．書名 狂い咲く、フーコー　京都大学人文科学研究所 人文研アカデミー『フーコー研究』出版記念シンポジウム全記録＋（プラス）	

１．著者名 塚原東吾・綾部広則・藤垣裕子・柿原泰・多久和理実編；箱田徹ほか著	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 242
３．書名 よくわかる現代科学技術史・ＳＴＳ	

１．著者名 大野光明・小杉亮子・松井隆志編；箱田徹ほか著	４．発行年 2021年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 240
３．書名 メディアがひらく運動史（『社会運動史研究』3）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

アンドレアス・マルム著；箱田徹訳「化石燃料インフラ破壊を道徳的に擁護する」
https://hapaxxxx.blogspot.com/2021/12/blog-post.html
アンドレアス・マルム著；箱田徹訳「崩壊するCOP：グラスゴー会議と2021年を振り返る」
https://hapaxxxx.blogspot.com/2022/01/cop2021.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関